

「世間・運命観」と東アジアの情報社会
—技術・人工物・ロボット・災害・プライバシーと日本・アジア的価値観—

Technology, Artificial Things, Robots, Disasters and Privacy Seen from *Seken* as the
Cultural-Existential Perspectives in Japan and the ‘Far East’

仲田 誠
NAKADA Makoto

筑波大学地域研究 第38号 別刷

平成29年 3 月

筑波大学人文社会科学研究科
国際地域研究専攻

「世間・運命観」と東アジアの情報社会 —技術・人工物・ロボット・災害・プライバシーと日本・アジア的価値観—

Technology, Artificial Things, Robots, Disasters and Privacy Seen from *Seken* as the Cultural-Existential Perspectives in Japan and the ‘Far East’

仲田 誠
NAKADA Makoto

Abstract

One can posit that Japanese people currently live in two realms of society at the same time: *Shakai* and *Seken*. In contrast to *Shakai*, which is society in relation to values and ways of seeing things imported from Western modernity, *Seken* is a traditional and ingenious realm/aspect of our society where the meaning of ‘a good-virtuous life’ is important. To put it differently, *Seken* is a cultural-existential *Ba* (place, space, locus) where people share various views on life or the world itself from cultural-existential perspectives. The term *Seken* itself emanates from Buddhism. It derives from the Sanskrit word *loca*. *Se* means time or transient situations of this world/life and *Ken* means in-between, space, place, locus, i.e., the transient *Ba* consisting of transient human activities and the place where these activities are done. In Japanese history, these views were combined with other views coming from *Shinto*, Confucianism, the praxis of internalizing the human mind in the tradition of literature, *Kokugaku*, *Bushido*, and others. These combined views bestowed on forming the criteria, ‘What is a good-virtuous life?’ This paper discusses the implication of the findings concerning *Seken* derived through my previous research. These studies were conducted in Japan and other ‘Far East’ countries and we discovered that *Seken*-related meanings or some perspectives similar to *Seken* exist in the minds of people in the ‘Far East.’ We also found that *Seken*-related meanings and some other views on ‘roboethics,’ ‘privacy,’ ‘publicness’ and others form a kind of a network of understanding in Japan and the ‘Far East.’

Key words : Roboethics, Privacy, Japan, Far East, *Seken*-Destiny-View

キーワード：ロボット倫理、プライバシー、日本、東アジア、世間・運命観

1. 本稿のねらい

本稿では、最新の調査結果を紹介しながら、「清貧の思想」、「自然との一体感」、「災害天譴論」などという価値観を含む「世間・運命観」についてとりあげ、この日本的あるいは東洋的なもの

の見方・価値観のなかみについて論じていく。「世間・運命観」は筆者が1981年以来日本で実施してきた「災害観調査」を通じてその実態があきらかになってきたものだが、このような価値観が「ロボット倫理」や「プライバシー意識」といったものとも関連性を有することが過去の調査でわかってきている。この関連性の内容についてもあらたなデータをもとにくわしく検討する。

また、本稿では日本のデータと日本以外の東アジアの国・地域（中国、韓国など）のデータを比較し、「世間・運命観」が日本や東アジアでどう共有されているか、また、「世間・運命観」が「ロボット観」や「プライバシー観」などどう関連しているか、このような点についても分析をおこなう。これによって人生や世界に対する一種の実存的ものの見方である「世間・運命観」の（あるいはそれに類似する価値観）の東アジアにおけるひろがりについて確認する。

本稿でくわしく述べるが、日本と東アジアの国・地域では人生やこの世界での生き方に関してかなり類似したものの見方が存在する。「西洋的な視点」からのみ現代の情報社会について考えてきた人にとっては驚くべき事実かもしれないが、この驚くべき事実の中に過去の東アジアの歴史や今後の東アジアでの人々のつながりの方向性について考える重要な手がかりが潜んでいる。

II. 「もののあわれ」とロボット

本稿の主たる目標は、「世間・運命観」、人生や世界に対する人々のものの見方に関してその内容をあきらかにすることだが、そのためにまず最初に日本的なロボットである「鉄腕アトム」をとりあげながら、「ロボットとはなにか」、「世間・運命観」とはなにかという点について考えてみたいと思う。なぜ「鉄腕アトム」かというと、後で詳しくのべるが、ロボットに対するものの見方は「世間・運命観」と連動するということがあきらかになっているのである。「もののあわれ」といった見方が先端技術と人生の意味を媒介するのである。「世間・運命観」はそのような媒介する働きをするものであり、それはたぶん鉄腕アトムの意味とも連動している。アトムは日本的・東洋的価値のある意味で代表しているのである。

子供の時にマンガ雑誌やテレビで見た『鉄腕アトム』の最終回のエピソードが「アトムの自己犠牲」だという話を筆者は知らなかったのだが、ある時どこかでそのことを聞いて少し考えるところがあった。いかにも日本的なエピソードであるような気がして、そういえば『てぶくろてっちゃん』のエピソードもなにかそのような何か物悲しいものが多かったなと思い出したりしたのである。藤子不二雄の子供向けマンガに登場するてっちゃんは何でも作ることでできる魔法の手袋をもっているのだが、ある日山で迷った時に新聞紙か何かでロボットを作る。もうこれ以上歩けないと泣いていた友達と自分のことをロボットは背負って町が見えるところまで連れていってくれるのだが、ちょうどその時に雨が降り出し、紙でできたロボットは溶けてなくなってしまふ。無償の愛というもののあわれというか、小学生低学年だった筆者は当然そんな高等なことばを知りはしなかったのだが、とにかく印象に強く残るエピソードだったのである。

外国ではロボットはそんな情緒的な対象ではなく、実用性への期待感と警戒感の入り混じった目で見られることが多いようである。ロボット倫理という研究分野が欧米先進国では盛んである

が、そこではロボットを兵隊に使うことで敵を攻撃することの是非、その場合のロボットの責任という現実的なようでいてどこか感覚的にずれた話をしている。

欧米ではロボットに「良心」その他の倫理観を埋め込む (embodiment) という話もよくするが、これも日本の研究者には納得がいかないことが多い。心や感覚は外から人工的にもののように埋め込むことができるものなのか。アトムは子供の死を悲しむ科学者の切なくまた身勝手な(結局アトムを捨てるのであるから) 願望で生まれたのである。それは最初から出来上がった既製品としてアトムに埋め込まれたものではない。親に捨てられ、お茶の水博士に育てられ、悩んだり、希望をもったりしながら、その体験の中でアトムの心は育っていく。悩みも心の一部である。

これはいわば物語を進行させるための設定であるが、この設定はロボットそのものの現実社会でのありかたに関しても一つの大きな前提条件となっているのではないか。

悩む心というアトムの設定を介してわれわれはたぶん現実のロボットにも接する。介護ロボットは便利かもしれないが、そこには心はないのではないかと考えたりする。介護ロボットの「人間性」について真剣に考えたりする。これも考えれば不思議なことではあるが、このような見立てがいわばロボットの定義の一部をなすのである。一方、欧米ではロボットをめぐる倫理とか「主体性」が問題になることが多いのだが、「主体的な存在」であるロボットなのにそこには既製品としての倫理コードといったものが外から埋め込まれる。

ロボットが人間の世界にはいつてくるためには、ロボットはまず最初に人間的なものとして見立てられなければならない。人間的なものとして見立てることで、主体や責任、倫理というものが問題になってくるのである。(人工知能による自動運転車もロボットのものとするから責任の問題がうまれる。機械であるとみなせば、責任の問題はありえない。機械である自動車には責任の問題は帰属させることはできない。) 欧米人は日本のことをアニミズムの国とよくいうが、ロボットに主体や責任の問題を帰属させようとするのもアニミズムである。心ではなく、因果関係や責任の所在がモノに帰属させられるアニミズムである。

今回筆者は、過去1、2年の調査の内容を比較し、それをもとに現代社会のさまざまな問題をさらに考えていこうと思うのだが、その中でロボットに関する質問を質問紙の一部に加えた。またその中にアトムの「自己犠牲」の物語に関する質問をおこんだ。調査自体はロボットだけを問題にするのではなく、ロボット倫理や情報社会におけるさまざまな問題を広い世界観や人生観の(「世間・運命観」図式ととりあえずよんでいる) なかに位置づけることをめざすものだが、非常に興味深い結果が得られている。ロボットに関する意識や判断は単独の問題の領域(ロボットならロボットだけという) を越えて別の問題の領域にまでひろがっているのである。

たとえば、ロボットの問題は「生き方」、あるいは「生きるだけでなく、よく生きる」とか「どのように生きるか」とかそのような問題に関する領域にまでひろがっている。

鉄腕アトムの物語は技術への期待や不安などから出発し、技術と生死が交差するところで広がりを見せ、さらに、現実世界のロボットと人間のかかわりの問題にまで(「ロボットとはなにか?」) 及んでいくのだが(そのことで人間とロボットが戦ったりする)、われわれの調査結果が示すのもロボットに関するそのような意味の広がりである。わかりやすく言えば、アトムの物語

における見立ては現実のロボットの意味を規定する見立てにもなっているということである。

「ロボットとはなにか?」、「人間になりかけているロボットとはどのような存在であるか?」という問いが物語だけでなく、現実問題をながめる視座になり、それがさらに人生の意味の問題にまでひろがっていくのである。

次の表は2014年の日本での調査の結果をまとめたもので、「(地球をすくうために) アトムが自己を犠牲にした」という鉄腕アトムの最後のエピソードへの共感度とさまざまな問題・出来事への共感度、肯定・否定の度合いとの関連性を示すものである。「アトム」の物語（への共感体験）が、日本的なもののあわれ意識、災害時の自己犠牲への意味、事故や事件の被害者への共感、ロボット兵士への抵抗感、ロボット利用の肯定、自動運転車への賛否、地球や大地に対する汎生命論的共感、針供養・ロボット供養的なものへの共鳴、徳のある人生の意味、こういったものにつながり、ひろがっていることがわかる。

このようなひろがり実は現実のロボットに関する問題についてもあてはまることなのである。われわれの調査によれば、ロボットに関するさまざまな問題への共感や賛否はロボットの問題だけにとどまらず、プライバシーの問題や供儀の問題、孤独死の問題、地球環境の問題、地域活性化の問題、ものの豊かさより精神性を重視する生き方への共感などと連動している。これもまたアニミズムというなら、アニミズムは現代日本の深部にとどまることなく日常の意識の場面にもひろく浸透している。ある意味ではアニミズム的感覚によって技術の問題の根幹にまで入っていくことが可能になっているともいえる。

表1 「鉄腕アトムの自己犠牲エピソード（への共感）」とさまざまな問題・意見への共感・賛成度の相関性（2014HG 日本）

	鉄腕アトムの最後のエピソードが地球を救うためのアトムの自己犠牲だったと知ると感動する。
夏の花火やホタルなどはかないから美しいのだと思ったりすることがある。（「もののあわれ」）	.300**
災害などで自分を犠牲にして他人を助けた人の話を聞くと自分も人生を大切にしたいと思ったりする。	.452**
自動化されたロボット兵士を使って戦争で相手の人間を殺傷する計画があることを聞くと、なにかやりきれなさを感じる。	.424**
小さな子供を一人で家におくよりは、監視機能などをそなえた自動化されたロボットに世話をさせる方がましだ。	.448**
人工知能による自動車自動運転ロボットは人間のミス等を防ぐので、完全自動運転でなくても、安全性が増すならそれでよい。	.327**
針供養という儀式があるように、使われなくなったロボットやコンピュータはもっと供養されてもいい。	.397**
人間は豊かになりすぎると墮落しがちなものだ。	.270**
人のためにつくせばいつかは自分にプラスとなってかえてくるものだ。	.344**

1)**= $p<0.01$, *= $p<0.05$ （両側）。上記表の数字は相関係数。2）福島、宮城、岩手被災3県の25～44歳男女600人対象。

欧米でのロボット倫理の議論は一方で緻密であるが、その緻密さはあくまでも論理的なものでしかない。しかもその論理は「見立てる」というもともと論理的でも客観的でもないものをベースにしている。

ここにあるのは、分析哲学的というか、ロボットの現実の運用にかかわる条件を一つ一つ洗い出していき、条件をできるかぎり網羅した上で、ロボット兵士が民間人を殺害したときに誰の責任かという論争をしたりする一つの設定である。責任を負うべき存在としてロボット自身も候補者に含まれることはほとんどはじめからデファクトで、そのためにagentということばを引っ張り出してきたりする。そこからさらにpatientという議論が派生したりする。

欧米の議論は緻密であるが、それはたぶん共通の世界観に支えられている。デカルト以来続く物心二元論あるいはプラトン以来の質料・形相二元論である。それは一つの世界観ではあるが、そこにはアトムやてぶくろてっちゃんのエピソードを通じてロボットの世界に入っていくような繊細さはない。質料のきめ細かさ（たとえば紙で作ったロボットの強さともろさ）は形相の本質（たとえば強いがはかないロボット）に影響を与えることはないだろうし、形相も質料の内実に影響を与えることはないだろう。繊細さは感覚的なものであるが、日本のロボット自体は質料的に繊細なものが多いように思う。そもそもロボットは強くて同時に繊細なものではないか。人間的な身体の繊細さがロボットの身体的な形質をきめている。空飛ぶ無人攻撃機をロボットというのはこの繊細さとは関係がない。

ただし、繊細さはもしかして日本のものだけではないのかもしれない。繊細さは事物と人間との関係のありかたを規定する一つの指向性のようなものだが（和辻の『風土』の議論参照）（和辻 1979）、実は欧米でも日本的な繊細さ、もののあわれという感覚はあるようなのである。Turkle (2007) は Winnicott の「移行対象」(transitional object) ということばを使ってタマゴッチを論じているが、タマゴッチとかテディベアーというのはある種の両義的でその意味で繊細な感覚にかかわる存在であろう。また、ルンバに関する興味深いレポートも報告されている (Kahney 2006)。ルンバといえば、お掃除ロボットだが、欧米人のなかで自分の家のルンバに愛情を感じるケースがすくなく報告されるという。家にひとり残してはかわいそうだからということで散歩にルンバをつれていく人までいるのだということである。ある意味での「もののあわれ」かもしれない。

以下、筆者は、日本や日本を含む東アジアにおける人生観・世界観の問題をとりあげ、さらにこれがロボット倫理や情報倫理の問題とどう連動しているか実際の調査データをもとにはなしをするが、たぶんこれはこの領域（ロボット倫理、情報倫理）における（世界で）最初の試みである。ロボットを見る目が人生の意味を見る目と共同で働いているというのは東アジア全体に言える傾向だが、さらにそこから日本的な繊細さが東アジア全体にも見られるのかは具体的にデータを分析してその上で考えるべきテーマである。

Ⅲ. 日本、中国、韓国調査から見た「世間・運命観」

1. 日本と東アジアにおける「世間・運命観」

筆者は1980年代初頭から始めた独自の日本的災害観の調査を通じて日本的な価値観・世界観・人生観（「世間・運命観」と暫定的によんでいる）の問題に踏みこんでいったのだが、こうした価値観＝「世間・運命観」とは、ひとことでいえば、この世界を「より良い人生とはなにか」という視点からとらえるものの見方のことだといえる。

世間ということばはもともと仏教に由来し（井上 1977）、その後仏教的なものを核に日本の歴史のなかで儒教や神道、民間宗教、国学、武士道などが融合し、日本的な世界観・人生観のひな型のようなものが成立していったと考えられる。それがどのように融合したかは説明が難しいところだし、いつこうしたものの見方が融合して「世間・運命観」とでもよべるものになったかは詳しい研究が必要である。たしかなことは、こうした日本的あるいは東洋的な価値観に起源を有する世界観・人生観といったもの（以下では「世間・運命観」とよぶことにする）が現代の日本人の心のなかにも見出されることである。これは一見信じられないようなはなしだが、事実そうである。

そのことをたぶん日本ではじめて実証的に証したのが1981年の筆者の研究である（仲田 1982；廣井・仲田・他 1982）。

日本では古来、災害を天からの懲らしめととらえる考え方が存在してきた。

たとえば、笹本正治によると、鎌倉・南北朝の時代、中世の時代にあつては、災害など特異な自然現象はたんなる自然現象ではなく、この世にもたらされた異常事態、災いであると受けとめられた。自然現象は人の営みやこの世のありさまと無関係ではなく、したがって災いを取り除くには、国主や武家による徳や仁による治世あるいは施しが必要であると考えられてきた。「改暦」や「徳政（令）」はそのための大切な施策と理解されてきたのである（笹本 1996）。

これはいわば日本的災害観の原型とでもよぶべきもので、世の乱れ、徳や仁がおこなわれていないことが災いにつながるという考え方である。

江戸時代も災害は仁政の問題とむすびつけて論じられている。村上（村上 1979：63）は以下のような事例を紹介している。

「江戸時代において幕府政治解体期の世情や都市生活の実情をあきらかにした『世事見聞録』には、「窮民に仁政あらば 右体の天災も降るまじきか。天に先達つて違はざるの政を施し、鬼神も率ゐて法令を立て、よくその中を執りて、民と共に苦しみ、民と共に楽しむ事を知るべし」とあり、また「当生国々の窮民は、大体渴死するとも仁政も来たらず、助けくるべき人も来たらず」と痛烈な幕藩領主の施政にたいする批判をおこなっている。」

驚くべきことにこうした古代・中世、江戸期の考えは近代の大正時代になってもまだ残っている。以下は大正12年（1923年）の関東大震災後に当時の雑誌『太陽』（大正12年11月号）に掲載された山室軍平の手記である。

「思うに従来我國民はあまりに、不真面目であつた。あまりに物質欲にのみ憧れて、道義の念

は殆ど地を拂って居た。即ち吾々の立場から言えば一宗教的に言えば罪惡に身を委ねていたと信ずる」、「此度の震災は、物慾に耽溺していた我国民に大なる反省を与える機会であった。墮落の底に沈淪せる国民に対して大鉄槌を下したということは、大なる刺戟と反省とを与えるに十分であつた。」(山室 1923)。

これを宗教家特有のものの見方とするのは短絡である。多くの知識人、有名人が同じようなことを言っているのである。つまり、「今回の災害は天譴である」と。

たとえば、北原白秋はつぎのように天譴を歌に詠んでいる。「世を挙り心傲ると歳久し天地の譴怒(いかり)いただきにけり」。「大御怒(おおみいかり)避くるすべなしひれ伏して揺りのまにまにまかせてぞ居る」(北原 1924)。

鴨長明を思わせる無常觀を表明したのは作家の宇野浩二である。

「今度の震災後に発行された何かの新聞の記事の見出しに、＜三百年の文化の夢一朝にして烟と化す＞と書いてあるのを読んだ・・・この大都会が、その通り、あの九月一日のたった一つ時の大地震を境にして、全く煙の如く消えてしまった!・・・唯あれだけの震動の為に、僅二三十時間の間に、こんな跡かたもない姿になってしまうところの、我々の営みの果敢なさを感じない訳に行かなかった。」(宇野 1973)。

「災害は天が懲らしめのためにおこす」、つまり、天譴論に関する日本で最初の実証的調査は「大船渡調査¹」であったが、この調査の結果は、調査の立案者である筆者本人にとっても驚くような内容のものであった。当初の予測以上に天譴論や運命論に共感する回答者が多かったのである。1980年代といえば、すでに情報化、ハイテクの時代である。

調査結果が示すのは以下のような事実であった。

「災害発生時の生死は運命によってきまっている」という意見に「非常に賛成」と答えた回答者はなんと35.0%という高い数字で、「どちらかといえば賛成」まであわせると、64.9%という驚異的な数字になる。さらに天譴論への共感もかなりの数字に達したのである。

当時この結果に関して「岩手県の一地方の特殊な数字に過ぎない」と評した災害研究者もいたが、実際には同じような「驚異的」数字はその後の首都圏など日本各地の調査でくりかえし確認されている。たとえば、2008年実施の首都圏調査では、「最近災害が多いのは人間に対する天からのある種の警告である」という「災害は天の警告」論に対して67.4%の人が共感できると答えている。

その後、筆者は、環境問題に関する意識調査や情報倫理に関する意識調査とからめながら、くりかえし調査をおこなってきたが、その結果を示すのが、表2の数字である。これは、「大船渡調査」の質問項目を出発点としながら、日本的災害觀と関連すると思われる人生觀や世界觀を文献調査やインタビューなどを通じて抽出し、質問票にのせてきたものである。

この表にみるように、現代のわたしたちの心の中には、「天譴論」、「天の警告論」、「運命論」、

1 岩手県大船渡市およびその周辺地区在住の20～69歳の男女800名を対象に、1981年9月19日から9月24日の期間に面接法でおこなった調査。回収数は628票。「大船渡調査」に関しては以下の論文参照。仲田1982；廣井・仲田・他1982。

「清貧の思想」、「自己中心主義批判」といった価値観やそれを支えるものの見方が存在するのである。

以上、まず「世間・運命観」の（再）発見の過程について紹介してきたが、「世間・運命観」に関して大事な点は、このようなものの見方は日本だけにかぎられるものではないということである。

筆者はもともと日本人の災害観について調べる目的から研究を始めた。そしてそれが「世間・運命観」という一連の意味と深くかかわること、さらには、「世間・運命観」がロボットの意識、プライバシー意識、公共性の意識などとある種の意味の地平・場を形成するという点を明らかにしてきた。ここから次の問いかけが生まれてくる。現代の情報社会では技術こそ社会変動の大きな原動力だという考えが一般に存在するが、本当にそうなのか。技術は人の生き方の問題と切り離せないのではないか。東洋独自の人生観に基づく情報社会論、情報倫理というものは成立しないのか。

実際、欧米でもデジタル存在論などというかたちで研究をすすめ、東洋と西洋の比較に関心をもつ研究者は多数派ではないが存在する（Capurroなど）（Capurro 2006）。

情報倫理やロボット倫理の国際研究集会、学会で東洋からの参加者を見かけることはあまりないが、しかし、「より良い人生の意味の問いかけ」ということはどこの世界でも見られるものではないか。儒教はもともと人生を問う姿勢を伝えてきたものだろうし、日本的「世間・運命観」の源流の多くは仏教や儒教のように東洋に由来するものである。「天譴」の思想ももとは古代中国で生まれたものである。

また、東洋は濱口（1993）のいう「間人主義」やいわゆる集団主義がひろく社会のなかに浸透している文明圏であるという認識は一般的なものであるだろう（濱口 1993 : 49）。

そのような問題意識にもとづいて筆者は「世間・運命観」的なものが（「世間・運命観」とはここでは暫定的に使用することばである。世間的なものはあっても、東洋のそれぞれの国や地域では呼び名がちがっているだろうから）どの程度東アジアの人々のなかに見出すことができるかを日本での研究に引き続いておこなうことをきめた。以下に紹介する表2には、この東アジア各地域・国での調査の結果が日本の数字とならべて示してある。

この表2にみるように、東アジアでは「世間・運命観」（あるいはそれに類似した考え）への共感性が全体的にかなり高いのである。これは筆者の研究で初めてあきらかになった知見である。われわれは日頃、東洋に属しながら東洋の他の国や地域の実情に疎いことも多いが、実のところ、表の数字で見ると、東アジアの人々の意識や思いはきわめて近いのである。

表2 「世間・運命観」への共感（東アジア）

	1995G 日本	2000G 日本	2008G 日本	2011HG 日本	2010CG 中国	2012TS タイ	2014HG 日本	2015CG 中国	2016KG 韓国	2014TWS 台湾
現代生活の中で人間はあまりにも自然からはなれ過ぎてしまっている（自然遊離）	73.6%	—	79.8	78.0	90.6	91.5	71.2	82.0	86.0	91.1
人間は豊かになりすぎると墮落しがちなものだ（豊かさは墮落）	83.7	81.5	84.0	87.0	86.2	65.2	80.4	76.3	67.3	85.1
人間には何らかのかたちで運命というものがある（運命論）	84.4	79.0	81.2	82.4	81.5	52.9	77.5	76.3	80.4	81.8
世の中には科学で説明できないことも数多くある（科学否定）	88.5	88.3	86.2	88.2	94.2	89.4	81.8	89.3	91.0	97.8
今の日本には自己中心的な人間が多すぎる（自己中心主義批判）	85.5	88.3	90.2	80.3	93.8	—	76.8	91.6	91.0	86.7
今の世の中では一人一人の人間はあまりにも無力である（無力感）	71.9	64.8	73.4	77.8	—	—	72.7	—	—	61.9
今の世の中が明るく楽しそうに見えるのは表面的な部分だけである（うわべだけの楽しさ批判）	73.3	65.6	71.0	72.7	83.8	—	70.0	77.6	83.0	58.0
人のためにつくせばいつかは自分にプラスとなつてかえってくるものだ（誠実重視）	—	68.1	77.2	74.3	83.4	95.1	66.5	78.0	79.7	77.9
災害は天が人間をこらしめるためにおこすものだ（天譴論）	62.7	49.5	—	—	—	12.8	—	—	—	—
最近災害が多いのは人間に対する天からのある種の警告である（災害は天の警告）	—	—	67.4	60.2	81.7	19.7	59.0	80.0	75.3	64.1
誰でも、誠意をもって接すれば心が通じるものだ（誠意は通じる）	—	—	—	—	—	—	46.2	76.3	85.9	51.9
（他人の意見に頼らず自分一人の判断でことを決めた方がうまくいく（個人主義））	—	—	—	—	—	42.3	52.2	49.0	73.3	19.9

1) 上の表の数字は、「共感できる（このような意見や考えに）」と「ある程度共感できる」の合計値。

（この表で紹介した調査の説明。1995Gは1995年に東京で実施（20歳以上、587人）。2000Gは2000年に首都圏で実施（20歳以上、611人）。以上の初期調査の詳しい内容については以下の文献を参照。Nakada（2006a）；Nakada（2006b）。より近年の調査の概要は以下のとおり。「2011HG調査」：福島、宮城、岩手の被災地地域在住の25～44歳男女744人。調査実施時期は2011年8月19日～21日。インターネット利用者の統計数字に基づき、調査対象者を年齢・性別ごとに割り当てた。2014HG調査：2011HGと同じ手法で、同じ対象（福島、宮城、岩手被災3県の25～44歳男女600人）に対して2014年に実施。2010CG調査：2010年8月に中国で北京、上海、広州在住25～44歳男女481人を対象に実施。2014TWS調査：2014年7月に台湾政治大学181名の学生を対象におこなった調査。2012TS調査：2012年1月にタイでチュラーロンコーン大学学生141人を対象に実施した調査。2015CG：2015年9月に中国で北京、上海、広州在住25～44歳男女300人を対象に実施。2016KG調査：2016年9月6日5月23日～5月31日の期間に韓国・ソウル・釜山両市在住のインターネット利用者男女300名（30～39歳）を対象に実施。）

2. 東アジアにおける「世間・運命観」と「ロボット倫理」・「プライバシー」

「世間・運命観」に関して見落としてはならない点は、これがけっして迷信くさく非合理的な意味の世界のみにとどまっているものではないということである。これはまず日本での調査を通じて確認された点であるが、われわれは東アジアでも調査を続けるうちに、同じようなことは東アジアに関してもいえるのではないかという結論にたっした。

以下でそのことを具体的にみてみるが、ポイントは、「世間・運命観」への共感はそれだけにとどまらず、ロボットへの意識や評価（ロボット倫理）、プライバシーの問題への考えかた・感じ方、公共性の問題、政治関心、社会的供儀に関する共感などと大きな意味のつながりをつくっているという点である。これはこのような項目の間の相関性を統計的に調べることでわかることだが、「世間・運命観」はロボット倫理、情報倫理、「私と公の関係」、企業倫理、原発問題への意識などを含んで一つの意味のネットワークといったものをつくっているのである。

次の表3は、「世間・運命観」の一部である「自然からの遊離」と「清貧の思想」が「ロボット倫理」に関するさまざまな意見、考えとどう関連するかを相関係数を計算しまとめたものである。「ロボット倫理」はロボットという最先端の技術と人間のかかわりに関する倫理的・価値判断的な問いについて考えようとする学問領域である。この場合の倫理的、価値判断とは技術そのものの意味と切り離せないわけで、「世間・運命論」的な思考とはまったく別の場所に位置する問いであるように思える。しかし、相関係数をみるかぎり、両者はじつはきわめて近い位置にいたのである。

表3 「自然からの遊離」・「個人主義」と「ロボット倫理」の相関（2014HG 日本）

	自然からの遊離	清貧の思想	個人主義
自動化されたロボットに老人の介護をまかせることは便利ようだが、同時に、機械に世話される老人はちょっとかわいそうな気がする。	.309**	.311**	-.015
自動化されたロボット兵士を使って戦争で相手の人間を殺傷する計画があることを聞くと、なにかやりきれなさを感じる。	.275**	.312**	.014
自動化されたロボット兵士を使って戦争で相手の人間を殺傷することは、それを開発した技術者や企業・組織の責任だ。	.236**	.242**	.090*
生命をもたない地球、大地、山や川であってもそれを慈しむのは人間的な感情として当然のことだ。	.297**	.297**	.082*
生命をもたないロボットでも、作った人の心がこもっていることを考えると、むやみに壊したりすることには抵抗感がある。	.276**	.254**	.142**
自然災害などで住んでいる家が壊されたりすると、自分の大事な一部がなくなったような気になり、悲しくなる。	.261**	.291**	.047
針供養という儀式があるように、使われなくなったロボットやコンピュータはもっと供養されてもいい。	.248**	.231**	.170**
ペットロボットなどの心を癒すロボットに共感するのは、アニメの登場人物に共感するのと同じで自然なことだ。	.158**	.188**	.140**

ペットロボットなどの心を癒すロボットは、それが機械だとわかっていても、可愛いと思えてしまう。	.229**	.221**	.095*
学習効果をあげるために、ロボットを学校で子供の教育用に使うのは、良いことだ。	.084*	.131**	.256**
人間性や知識面で問題がある教師よりも、人工知能や人工情動（感情）を備えたロボットに子供の教育をまかせるほうがまだましだ。	.051	.029	.367**
小さな子供を一人で家におくよりは、監視機能などをそなえた自動化されたロボットに世話をさせる方がましだ。	.128**	.171**	.264**
鉄腕アトム最後のエピソードが地球を救うためのアトムの自己犠牲だったと知ると感動する。	.242**	.270**	.150**

1)**相関係数は1%水準で有意(両側)、*相関係数は5%水準で有意(両側)、**や*がない数字は有意な相関関係なし。

それにしても「ロボット」に対する問いが「世間・運命観」と関連性をもつという事実は驚くべき事実であることはたしかだが、われわれが近年の調査で見出したことは、この驚きをさらに強めるものであった。

以下の表4は、「自然からの遊離」と「清貧の思想」が「ロボット倫理」と中国人の意識のなかでどう結びついているかを示すものだが、日本の場合と同じように、中国の調査でも「世間・運命観」は「ロボット観」と結びついている。「個人主義」と「ロボット」との関連性も日中で似ている。ただ、「会社備品の私的利用肯定」に関しては違う。推測だが、中国の「世間」とは「情実」的なものへの指向性を含むものかもしれない。(紙幅の関係でデータの一部だけ示す。)

表4 「自然からの遊離」・「個人主義」と「ロボット倫理」の相関(2015CG 中国)

	自然からの遊離	清貧の思想	個人主義	(会社備品の私的利用肯定)
ロボットに介護をまかせることは便利ようだが、同時に介護される人の社会的孤立を強めるので問題がある。(介護批判)	.319**	.125*	.013	.010
タマゴッチのような仮想生命体にも子供が同情や慈しみの心を感じるのは自然なことだ。(仮想生命体共感)	.199**	.058	-.015	.085
自律意思や意識がない昏睡患者や胎児に権利があるように、ロボットにも将来権利が与えられるべきだ。(ロボットへ権利を)	.039	.168**	.223**	.263**
生命をもたない地球、大地、山や川が慈しみの対象になるように、ロボットも将来慈しみの対象になるだろう。(汎生命的ロボット観)	.050	.116*	.189**	.156**
ロボットに子供の世話をさせるのは、子供を一人で放置しておくより良いことだ。(子供の世話肯定)	.103	.099	.124*	.197**

1)**相関係数は1%水準で有意(両側)、*相関係数は5%水準で有意(両側)、**や*がない数字は有意な相関関係なし。

2)「(会社備品の)私的利用肯定」=「あまり会社や同僚に迷惑がかからないなら、職場の備品(ノートや筆記用具など)を自宅に持ち帰って私的に使うのは、それほど悪い行為ではない」

韓国の場合、日本や中国と違い、「自然からの遊離」と「清貧の思想」は「ロボット倫理」とほとんど関係がない。これも重要な発見である。一方、「個人主義」や「私的利用」は「ロボット倫理」とかなり強いつながりをみせている。

表5 「自然からの遊離」・「個人主義」と「ロボット倫理」の相関（2016KG 韓国）

	自然からの遊離	清貧の思想	個人主義	（会社備品の）私的利用肯定
介護批判	.094	.085	.146*	.077
仮想生命体共感	.096	.078	.193**	.150**
ロボットへ権利を	-.127*	.086	.223**	.423**
汎生命的ロボット観	.066	.025	.141*	.189**
子供の世話肯定	-.017	-.009	.169**	.099
ロボットの感情表出機能	-.082	.038	.131*	.195**
ロボットはまがいもの	.084	.026	.022	.185**
学校での利用肯定	.077	-.049	.113	.141*
戦場でのロボット使用肯定	.009	-.002	.015	.042
家庭でのロボット使用肯定	.052	.032	.088	.014

1)**相関係数は1%水準で有意(両側)、*相関係数は5%水準で有意(両側)、**や*がない数字は有意な相関関係なし。

次に「世間・運命観」と「プライバシー」意識・「プライバシー」とかかわる価値観との関連性をみてみたい。紙幅がかぎられており、他の分析も予定しているので、プライバシーの問題については概略だけのべたい。

まず韓国のデータを取りあげたいが、「世間・運命観」にかかわる項目と「プライバシー」に関わる項目を因子分析（主因子法、バリマックス回転）にかけると、「世間・運命観」の場合は3つの因子、プライバシーの場合は2つの因子をえる。それを相関させると以下のような表6の数値をえる。この表をみるとあきらかなように「世間・運命観」は「プライバシー観」と強い関連性を示している。ロボット倫理の場合とはことなる結果がえられている。この表の数字をみるかぎり、「世間・運命観」は重要な社会問題に関する人々のものの見方を規定するはたらきをしているようにみえる。

また、韓国同様、中国、日本でも、同じような知見がみいだされている。つまり、「世間・運命観」と「プライバシー観」は強く関連している。（紙幅の関係で詳しいデータの説明はできない。）

表6 「世間・運命観因子」と「プライバシー因子」の相関（2016KG 韓国）

	プライバシー尊重	プライバシーより集団や個人の近さ
世間運命1（現代文明批判）	.510**	.132*
世間運命2（他者指向）	.312**	.379**
世間運命3（天譴・運命）	.139*	.251**

1)**相関係数は1%水準で有意(両側)、*相関係数は5%水準で有意(両側)、**や*がない数字は有意な相関関係なし。

表7 「世間・運命観因子」と「プライバシー因子」の相関（2015CG 中国）

	プライバシー保護	プライバシーより伝統的価値・友人関係
世間運命1（現代文明批判）	.438**	.147*
世間運命2（他者指向）	.122*	.380**
世間運命3（天譴・運命）	.096	.240**

1)**相関係数は1%水準で有意(両側)、*相関係数は5%水準で有意(両側)、**や*がない数字は有意な相関関係なし。

表8 「世間・運命観因子」と「プライバシー因子」の相関（2014HG 日本）

	事件事故の関係者（容疑者・被害者）の個人情報 情報の必要性・内面開示の重要性	SNSでの個人情報 （顔写真）公開に抵抗感
現代文明批判	.235**	.416**
他者指向・互酬性・天譴共感	.427**	.032

1)**相関係数は1%水準で有意(両側)、*相関係数は5%水準で有意(両側)、**や*がない数字は有意な相関関係なし。

IV. 「世間・運命観」についてあらためてくわしく考察する

以上みたように「世間・運命観」はただの古臭い合理性のない考えではなく、生活への積極的な指向性、批判的意識、より良い人生に関する「構え」とも関連している。

われわれが2006年に福井と東京で実施した原発の不安感に関する調査では、「世間・運命観」は、「環境にやさしい生活への指向性」などとも連動して原発不安感にかかわっている。また、原発への不安は、環境問題、その他食の安全問題などとセットで存在している。これはまた全体として「世間・運命観」と関連性をもつ。あるいは、原発問題や環境問題、その他食の安全問題などへの「構え」が「世間・運命観」に反映されているともいえる（仲田 2007）。

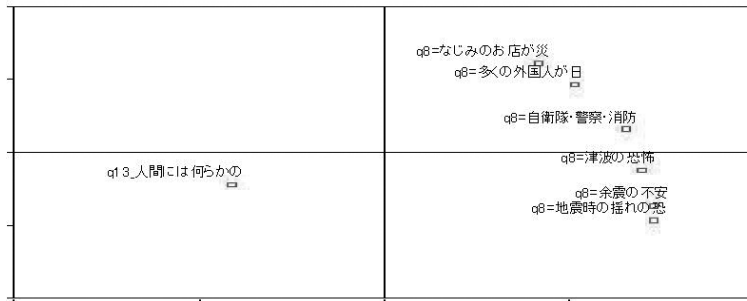
「構え」とは、「より良い人生への課題」として物事を自己のものとして受けとめようとする姿勢なのではないか。そこには社会問題や技術への姿勢も含まれる。

この「構え」やそれとかかわる視点は人生に対する鳥瞰図のような見方を可能にするものではないか。

「世間・運命観」とはたしかに世の中の問題を高い位置からながめることであるように思える。しかし、この高い位置からながめることが可能なのは、一方で、こうした問題を自己のものとして受けとめている姿勢があるからではないか。つまり、鳥瞰図的視線は内面化の過程も同時にあらわしている。外から高い位置からながめると同時に内から低い位置から共感する。いうならばこのような「外」と「内」の連動性こそ日本的価値観の特徴なのかもしれない。

次の図は、拙稿（仲田 2012）から一部転用したものである。

図1 災害体験と「運命観」とのプロット図の中での位置 (2011HG 日本)



この図について説明したい。2011HG調査（被災3県の住民対象）のデータを用い、「なじみの店の消滅」、「外国人の国外脱出」、「自衛隊・警察・消防の活躍」、「津波の恐怖」、「地震時の揺れの恐怖」、「余震の恐怖」といった災害時の経験に関する人々の印象度の度合いを分析項目として主成分分析すると、2つの主成分が得られ、プロット図を描くことができるようになる（プロットが何を意味するかは直観的な解釈によってしかつかめない）。

縦方向と横方向がそれぞれプロット図を構成する2つの次元をあらわす。これに「人間にはなんらかのかたちで運命がある」という「世間・運命観」の1項目を加え、主成分分析をおこなうと図1が得られる。（災害体験に関する6項目でプロットを描いた場合と「運命論」を加えた7項目でプロットを描いた場合でプロット図はほとんど変化しない。）

この図をみてすぐにわかることだが、「運命観」はいわば意識の高み（鳥瞰図的な高い視線の位置）に立つような場所に位置している（図の縦と横をいれかえればさらにはっきりするだろう）。

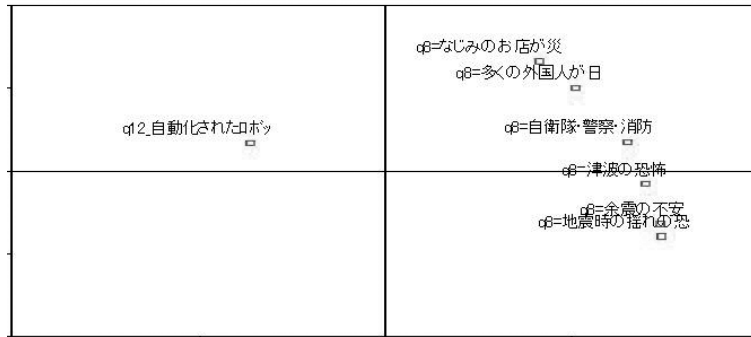
さきほど、「世間・運命観」は人生を高い位置に立ってながめる「構え」にかかわるのではないかという考えを提示したが、このプロットはそれを裏づけるように思える。（なお、3年たった時点での調査データ＝2014HG調査＝を用いて、プロット図を描くと、やはり「運命観」は前と同じような「高み」の位置にある。）

しかもこの「高い位置」は「災害時の体験」という具体的で内面化された意識・思いの上に立つものであり、「内」の意識、内面の意識があってはじめてなりたつものである。つまり、この「高み」、「鳥瞰図＝超越的な視線」は「内面化」の過程も同時に示すものである。

興味深いことにこの「運命観」が立つ位置には他の「世間・運命観」も立つ。つまり、「世間・運命論」とは人生の経験を眺める「高み」に立つ「構え」なのである。

これだけでも興味深いことなのだが、さらに驚くべきとは、この「高み」の位置には「ロボット倫理」（「自動化されたロボットに老人の介護をまかせることは便利なようだが、同時に、機械に世話される老人はちょっとかわいそうな気がする」）やプライバシー意識の一部（「自慢話をするよりも、自分の病気やちょっとした失敗談などを話題にすると、友人や知人との距離感がぐっと縮まることもある」）も同じように位置する。「もののあわれ」も同じである（図2）。

図2 災害体験と「ロボット観」とのプロット図の中での位置 (2011HG 日本)



プライバシー意識も内面のはなしをしているように見えて同時に高い位置からこのような状況自体をながめている「構え」のありかたにかかわっているのではないか。

「もののあわれ」は「あわれ」と内から感じる内的な「感」であるとともにそれを通じて人の世そのものを俯瞰図的にながめるような「観」でもあるということだろう。「世間・運命観」そのものが「感」であり、「観」であるという二重性をもつものではないか。

しかし、ただたんに「社会的な問題として重要なものはなんですか」という質問に対する答えとしての「介護の現場などでのロボットの採用による福祉の内容の充実」はこの「高さ」の場所には位置づけられない。「災害時の印象に残った経験」としてあげられる「知人の死」、「身内の怪我（自分や家族の怪我）」も同様である。

たぶん、「高み」の視点に位置づけられるかいは、さきほど述べた二重の姿勢にかかわる。「福祉の充実」という選択肢には「観察」はあるが「内からの感覚」はない。「知人の死」には「内からの経験」はあるが「外からの観察」はない。

関東大震災後に芥川龍之介は次のように記している。「応仁の乱か何かに遇った人の歌に、『汝も知るや都は野辺の夕雲雀揚がるを見ても落つる涙は』と云うのがあります。丸の内の焼け跡を歩いた時にはざっとああ云う気がしました」（『廃都東京』）（芥川 1924）。たしかにここにも観察と内からの感覚がある。災害観とはもともとこのようなものではないのか。

中国や韓国でもこのような説明があてはまるかはここでは判断することができない。「高み」があるとしても、それをどのような手法で引き出すかは現在検討中である。一つ言えるのは、中国や韓国では「個人主義」や「情実指向性」も「世間・運命観」とつながっていることである。さらに「情実指向」は「誠意重視」ともかかわっていたりする。今後の分析が必要である。

V. 結論にかえて：「世間・運命観」に関する二つの仮説と今後の課題

ロボットに関する日本的繊細さというようなはなしを最初にしたが、ベルグソンのいえば、

日本的な認識とは事物の素材そのものあるいはその感触について感覚的に、「共感」的につかむところに特色があるといえるのではないか。その場合、事物は、知性によって一挙につかむものではない。「共感」というベルグソンの広く知られたことばを使えば、知性とは別の生命原理である「共感」が強くはたらくのが日本文化なのかもしれない（ベルグソン 1954 : 215）。

しかし、災害時などには事物との共感は成立しない。あるいは西田のいうような「純粹経験」、「有即知」という観察されるものと観察するものの「共感」をふくんだ関係は破綻している（西田 1950 : 68）。

「世間・運命観」とはそれを前提にして、今一度事態を語りなおすことで、そこにある種の共感性を取り戻すことなのかもしれない。だから「世間・運命観」は共感の図式であると同時に説明原理であるという二重性をもつ。「豊かになりすぎると・・・」というものの見方は共感・反感の感覚と同時に物事に関する説明原理にもなっている。災害などが起きた時も、われわれはなぜこれが起きたのか知りたいと思うのである。

もう一つ考えるべきことは、「世間・運命観」のような考え方がひろく存在することは認めても、ではそれがどこに存在するのかという問いだろう。

ふだん日本的災害観、天譴論など考えたこともないという人が大半であろう。自分の頭の中だけをさぐってみれば、そんなものは影もかたちもない。しかし、ふしぎなことに、「運命観」とか「天譴」とかいままで一度も考えたことがないようなことをきかれても回答者はちゃんと答える。学生などでもそうだ。しかもそれはでたために答えているのではなく、たしかになにか判断の基準となるようなものがある。それを本人が自覚しているかどうかはわからないが、でたために答えているのではないことはくりかえし同じような質問をしても同じような答えがかえってくるという点に示されている。ただ、回答者はそのつど変わっているわけで、つまり、共通の考え方のパターンのようなものがある。しかもそれは因子相互の関係性が示すように、一つの内的な構造のようなものをもち、そこから回答者は答えを引きだしているようにもみえる。ではその構造とはどこにあるのか。

ディープラーニングというものがあり、あれはいうならば、データそのものが潜在的な一つの構造をもち、人工知能がそれにアクセスし、パターンを人工的な神経の層の中で分散して表現することで構造のモデルをつくるということである。

これは「世間・運命観」の構造に似ている。筆者がおこなったことは、主成分分析の場合、縦と横の二次元空間のなかに「運命観」とか「災害経験」（の意味づけ）といったものがどこに位置するかを人工的に再現しただけだ。このプロットは筆者の頭の中にあるわけでもなく、筆者が描いたものでもないが、そのプロットによって「世間・運命観」の構造がよくみえるようになる。もしかすると、東アジアの価値観もこの潜在的な共通の構造のようなものを取り出すことで見えてくるものがあるのかもしれない。

以上仮説ではあるが、今後考えるべき課題として重要な問いであろう。

参考文献

- 芥川龍之介 1923 (1978) 「大震雑記」、『芥川龍之介全集』、第6巻、岩波 (1978)、177-178頁。初出：『中央公論』第38年第11号 (大正12年10月1日発行)。
- 井上忠司 1977 『世間体の構造』、NHKブックス。
- 宇野浩二 1973 「三百年の夢」 (初出：大正12年10月『新潮』)、『宇野浩二全集 第12巻』、中央公論社、1973。
- 北原白秋 1924 「大震抄」、山本美 (編) 『大正大震災災誌』、大正13年、改造社。
- 笹本正治 1996 『中世の災害予兆』、吉川弘文館。
- 仲田誠 1982 「災害と日本人」、『年報社会心理学 (日本社会心理学会)』、第23号 (1982年)、171-186頁。
- 仲田誠 2007 「日本の「運命観」と原子力への不安—日本の自然観・災害観と原子力への不安をつなぐもの—」、『比較文化研究』、第3号 (2007年3月25日発行)、104-116頁。
- 仲田誠 2012 「東日本大震災」を人々はどのように体験したか—被災地住民調査・筑波大学学生調査にみる災害体験の意味と解釈—、『国際日本研究の視点から見た東日本大震災と日本』 (2012年3月発行) (筑波大学国際日本研究専攻東日本大震災研究グループ)、63-80頁。
- 西田幾多郎 1950 『善の研究』、岩波文庫 (本書が最初に発行されたのは1911年である)。
- 濱口恵俊 1993 『日本型モデルとは何か』、新曜社。
- 廣井脩、仲田誠、(他4名省略) 1982 『災害常襲地域における住民の“災害観”に関する調査報告』、東京大学新聞研究所研究報告書、全118頁、1982。
- ベルグソン 1954 『創造的進化 (上)』、岩波文庫。原著：Henri Bergson 1907 *L'Évolution créatrice*.
- 村上直 1979 「天災と幕府・諸藩の政治改革」、『歴史公論』、昭和54年 (1979) 10月号、62-69頁。
- 山室軍平 1923 「真に国民反省の機」、『太陽』 (大正12年11月号)。
- 和辻哲郎 1979 『風土』 岩波新書。
- Capurro, Rafael 2006 “Towards an Ontological Foundation of Information Ethics,” *Ethics and Information Technology*, 8 (4), pp. 157-186.
- Leander, Kahney 2006 “The New Pet Craze: Robovacs,” *Wired* (online).
Available from <http://archive.wired.com/science/discoveries/news/2003/06/59249?currentPage=all>.
[cited 6 December, 2015]. This report was published on 16 June, 2003.
- Nakada, Makoto 2006a “Privacy and *Seken* in Japanese Information Society: Privacy within *Seken* as Old and Indigenous World of Meaning in Japan,” in F. Sudweeks, H. Hrachovec and C. Ess (eds.), *Cultural Attitudes towards Technology and Communication 2006*, Perth, Murdoch University, pp.564-579.
- Nakada, Makoto 2006b “The Internet within *Seken* as Old and Indigenous World of Meanings in Japan,” in R. Capurro, J. Fruebauer and T. Hausmanninger (eds.), *Localizing the Internet*, Munich, Fink Verlag, pp.1-30.
- Nakada, M., Tamura, T., Tkach-Kawasaki, L. et al. 2004 “Does Old Japan Determine New Japan? :The Relationship between *Seken*, the Internet, and Political Consciousness in Japan,” in F. Sudweeks, C. Ess (eds.), *Fourth International Conference on Cultural Attitudes towards Technology and Communication 2004*, Australia, Murdoch University, pp.143-157.
- Nakada, M. and Tamura, T. 2005 “Japanese Conceptions of Privacy: An Intercultural Perspective,” *Ethics and Information Technology*, 7(1), pp.27-36.

Turkle, Sherry 2007 "Authenticity in the Age of Digital Companions," *Interaction Studies*, 8 (3), pp.501-517.